

旧約聖書の最後の預言者マラキ以降、神がイスラエルにお語りにならない時代が400年以上続いていました。しかし、時が満ちて、神は突然、その沈黙を破られました。御使いを遣わしました。先週は祭司ザカリヤにあった御告げから考えました。

1. 主の選びとマリアの戸惑い（：26～29）

エリサベツが身ごもってから六ヶ月目のことです。場面はイスラエルを中心とする神殿から、異邦人の地と接するガリラヤのナザレという町に移ります。その町に住む一人の若い女性マリアのところに御使いガブリエルが神から遣わされて来ました。

彼女は処女であり、「ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけ」でした。ダビデの家系といえども一般の人々と同じように生活し、ヨセフもナザレに住んでいたようです。ただユダヤ人たちは先祖イスラエルの理想の王であったダビデの子孫からメシアが現れ、イスラエルの国を建て直してくれることを待ち望んでいました。この時、ヨセフとマリアは婚約中であり、彼女は「処女」でした。このことは神の御子が人となって、ダビデの子孫としてお生まれになるために必要なことでした。

そのような彼女が神の選びの中にあり、御使いが突然彼女に現れました。神が一方的にマリアを選んでいたので、その選びは神の恵みによるものでした。

結婚を控えていたマリアのところに御使いが現れて言います。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます」。彼女はひどく戸惑い、いったい何のことか考え込みます。「おめでとう、恵まれた方」ということばを直訳すると「喜びなさい、恵みを受けた者よ」となります。この二つのことは聖書の中で結び付けられています。つまり、神が恵みを与えてくださるから、人々は喜び、神を賛美するということです。

まことの神、主の恵みが私たちに与えられ、主が私たちとともにおられると教えられています。宗教的に敬虔に生きて来たわけでもなく、特別な能力があるわけでもなく、立派な成果を上げているわけでもない自分が、恵まれた者であり、神がともにおられると言われても、実感はないかもしれません。

しかし、聖書が告げていることは、神が一人一人にいのちを与え、それぞれを選び、導き、恵みを与えてくださっているということです。たとえばエペソ1章3～7節。神が一人一人を選んでくださり、救いを与えてくださったのです。私たちの行いの結果ではなく、神の恵みによることです。これは目には見えない霊的なことですが、事実なのです。

2. 受胎告知とマリアの問い（：30～34）

その後に御使いが語ったこと、マリアが経験すると告げられたことは驚くべきことでした。結婚前で処女であるマリアが身ごもると告げられたからです。それだけでなく、生まれてくる男の子に最高の称号が与えられているからです。三つの称号が与えられると言います。一つは、生まれてくる子は「イエス」と名付けられるべきでした。イエスとは、ヨシュアという名前をギリシャ語にしたもので、「主は救う」という意味があります。聖書で教えられているイエスが与える救いとは、人を罪と死の支配から勝ち取り、救いを与えることです。生まれてくる子はそのような意味での「救い主」であるということです。

二つ目に、その子は「いと高き方の子」と呼ばれます。「いと高き方」とは「神」のことです。生まれてくる子は「神の子」であるということです。聖書で教えられているのは、イエスが神であり、神の御子であるということです。ただこの時はまだマリアはそのようには理解できなかったでしょう。むしろ旧約聖書で預言されていたメシアの意味で理解したことでしょう。

三つ目に、その子はイスラエルの王となり、その支配が永遠に終わることがないということです。これは神がダビデに与えた契約の成就であると理解されたでしょう。ただ文字通りに永遠の御国の王となる方であるとはマリアにはまだ理解できなかったでしょう。

このように、救い主であり、神の御子であり、御国の王である方、ユダヤ人が待ち望んできたメシアがマリアから生まれるということです。マリアは圧倒されるような思いだったでしょう。

将来のことはともかく、今自分はヨセフと婚約中で、まだ夫婦の生活に入っていないのだから、子どもを身ごもるはずがないということははっきりと分かります。でも、自分がすぐに身ごもると御使いは言っているとマリアは理解しました。それで御使いに言いました。34節。マリアは男の人を知らない自分が身ごもること、そして生まれる子どもがメシアであることがどうして起こるのか説明を求めたのです。御使いが告げたことに真剣に向き合ったのです。

私たちが聖書から神のみわざについての記事を読みます。イエス様が神の御子であり、救い主としてこの世に人となって生まれたことを知ります。主イエス様によって神の国がもたらされるとの宣言を聞きます。神がみことばによって私たちに教えてくださることです。私たちに与えてくださる救いに関することなのです。ですから、真剣に向き合うことが必要です。「どうしてそのようなことが起こるのでしょうか」と求めていくなら、主が悟らせてくださり、信仰を与えてくださるのです。

3. 神の御業とマリアの献身（：35～38）

35節。天地万物を創造された神、いのちの源である神が、処女マリアの胎にいのちを宿らせるのです。さらに御使いは、神の不思議なすばらしい力はすでにマリアの親類のエリサベツのうちに働いていると言います。不妊のままで年老いていたエリサベツが身ごもった知らせはマリアのもとにも届いていたことでしょう。御使いは神の全能の力を宣言します。36～37節。

イエス様が普通の女性から通常の出産によって生まれ、その母が処女であったことを聖書は伝えています。聖霊によって受胎するという特別の奇蹟が神によって行われたのです。この奇蹟によって、永遠の神の御子が、まことの神であるご性質をどのような意味においても損なうことなく、しかも完全な人として生まれたのです。神がそのようなみわざをなさって、御子をこの世に与えてくださいました。それは、私たちの救いのためにそのことがどうしても必要だったからです。

へブル2章17節。罪人である私たちを救うためには、救い主は私たちと同じ人間である必要があります。他の人の罪の償いをするができるのは、罪を犯したことの無い人だけです。しかし、普通に生まれて来る人の中には、神の前に罪のない人は一人もいません。そこで神は私たちを救うために、神の御子を、聖霊によって、処女マリアの胎に宿らせ、生まれさせたのです。神の御子がアダムの罪の影響を受けずに人となられたのです。神の御子イエス様が、罪を除いては私たちと全く同じ人間となってください、罪のない生涯を送り、そして私たちの代わりに十字架で死なれました。そのイエス様の死によって、私たちの罪に対する神の怒りが宥められたのです。これ以外に、私たちの罪の問題が解決する道はなかったのです。ですから、処女降誕という超自然的な神のみわざは救い主の誕生に必要不可欠だったのです。

38節。マリアは自分の身を神のみわざのために用いてくださいと差し出します。処女のまま神の子の母となる決意を告白しました。その応答は簡単にできることではありません。とてつもない犠牲を伴うことでもありました。結婚前に身ごもることになれば、御使いのことばを伝えたとしても、ヨセフの愛を失うかもしれない、世間から白い目で見られるかもしれない、自分の一生を棒に振ることになるかもしれないのです。しかし、マリアは「どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように」と自分の身を神に献げました。

主がマリアとともにおられ、マリアは主から恵みを受けたのです。彼女が救い主の母となることも恵みですし、マリアがそれを受け入れることができたのも神の恵みです。その恵みは私たちにも同じように与えられるのです。

私たちには分からないことがたくさんあります。しかし、すべては神の御手の中にあります。そして、神は私たちに恵みを与えてくださいます。ですから、私たちにとっても大切なのは、神がすべてを支配なさっていることを認め、神のなさり方で事を進めておられるのを受け入れることです。

私たち一人一人も神の恵みを受けています。主がそれぞれと共にいてくださいます。神に選ばれ、導かれており、イエス・キリストを信じるなら救われます。神の恵みと臨在を感謝しましょう。

聖書の中には、理解できない、信じられないと思うようなことも出てきます。あるいはそれぞれの生活の中で自分はどうしてこのようなことが起こるのかという経験をするときもあります。しかし、真剣に向き合い、求めるなら、神が悟りを与え、神への信頼を与えてくださいます。みことばに向き合い、真理を知ることを求めましょう。

マリアが自分の身を神に献げることができたのは、神の恵みであり、神が共におられたからです。神がすべてを支配なさっていることを認め、神のなさり方で事を進めておられるのを受け入れましょう。そして、みことばによって神が促していることに応答していきましょう。